

研究主題

「学びの意義を実感する」とは何かを考える

—E S Dの視点に立った学習指導を意識した実践的研究—

大阪市立北津守小学校

山本 香織

1. 研究の背景

本研究は、E S Dの視点を取り入れながら学習過程を設定することで、子どもたちが学びの意義を実感することがどれだけ効果的かどうか、実践を通して検証するものである。

教師が小学校教育に携わっていくなかで、どれだけの子どもたちと関わっていくのだろうか。学校の規模が色々あるが、その答えは恐らく数えきれない。教師は出会ったすべての子どもたちの「幸せ」を願っている。教師にとって「幸せ」につなげるための使命として『教育』の充実が考えられる。それぞれの教科の大切さや学力定着のために様々な取り組みや工夫が日々なされており、各学校も子どもたちの課題をしっかりと考え、それによって研究主題を立てて日々教材研究を務めている。

ところで、教師は小学校生活を過ごす中で、教育が子どもたちの将来にどのように影響をしていくのか明確に捉えているだろうか。子どもたちに次のような質問をされたら教師はどのように答えるのだろうか。

「何のために勉強をしないといけないのか。」

咄嗟に「将来のため」「仕事に必要」などと答えがちであるが、これでは子どもたちはわかるようで、よくわからない反応をするであろう。

子どもたちにとっては、学んだことが「何に」「どのように」生かされていくのか、それによってどのような効果をもたらすのかを意識する必要がある。また、改めて教師も子どもたちの疑問に気づき、意識をもって学習過程を設定する必要がある。そのことによって、学校生活を豊かなものにすると考えられる。

実践にあたっては、国立教育政策研究所が提示しているE S Dの視点に立って、「その学習が何につながるのか、どんな力を獲得していけるのか、他の教科や活動、生活に

つながり、関わっているのか」をしっかりと意識させることにも重点を置き、研究を進めていく。

2. 研究の方法

対象：本校1年生14名

期間：平成29年5月～平成30年3月

教科：教科横断として進める

参考：国立教育政策研究所に提示「E S Dの視点」

(1)教材研究をするにあたって

①年間計画を年度当初に作成する。

教科や行事を一覧にした年間計画を作成し、教師が見通しをもてるようにする。各校従前より使用されているものを活用するが重要なのは、年間を通した流れを教師がつかむことである。

②題材の設定意義を明確化

題材のねらいや、身に付けたい力を明確にし、新学習指導要領や解説を熟読して教師が理解を深められる題材にする。

③指導内容の明確化

(文部科学省E S D教育推進の手引き)

- ・ なんのために学ぶか
- ・ どのようにまなぶか
- ・ なにができるようになるか
- ・ どのように取り組むのか

をじっくりと考えることで「何を教えるのか」を明確にする。

④この学びが生きることの明確化

学びが自らの生活にどのようにつながって、どう生かされるのかを意識してすすめることで、今後の学習への意欲を高められるようにする。

それによってつけた力が持続可能な社会の創造に寄与することにつなげられることができるようにする。

なお、国立教育政策研究所より「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(案)」を参考にして、単元を通

してどのような力を獲得できるかを考えながら取り組めるようにする。

(2)指導にあたって

①児童向けのアンケートの実施

年度当初に学習意欲アンケートを行い、実態把握後に実践にあたることで気づきが見られる。

＜昨年度実施したアンケート（例）＞

※昨年度は音楽科鑑賞学習を研究したために以下の項目内容とした。

1. すきな がくしゅうは ありますか
(はい・いいえ・わからない)
※ 「はい」とこたえたひとに ききます。

①そのがくしゅうは なんですか。()
②. なぜ その がくしゅうが すきなのですか。(から)

2. じぶんの すきなことや しっていることを ともだちに はなしをしますか。
(よくする・すこしする・あまりしない・ほとんどしない)

3. おんがくかの がくしゅうは すきですか。
(はい・ふつう・いいえ)
※ 「はい・ふつう」とこたえたひとに ききます。

①おんがくかの どの がくしゅうが すきですか。
(うたう ・ えんそうする ・ つくる ・ きく)
※ 「いいえ」とこたえたひとに ききます。

①なぜ すきでは ないのですか。(から)

4. おんがくかの がくしゅうが どんなことに やくにたっているのでしょうか
()または(わからない)

5. すきな おとや おんがくは ありますか。(はい・いいえ)
※「はい」とこたえたひとに ききます。

①すきな おとや おんがくを かきましよう。
()

②. なぜ そのおとや おんがくが すきなのですか。
(から)(わからない・うまくつたえられない)
※「いいえ」とこたえたひとに ききます。

①. たのしくなったり、 げんきになったりする おんがくはありますか。
(はい・いいえ・わからない)
※「はい」とこたえたひとに ききます。

②. それは どんな おんがくですか。
()

の学びが他の教科とどのような部分でつながっているのかを問えるようにする。

③視野を広げる

その学びが、学校生活や地域とどのようにつながっているのかと意識がもてるようにする。

④振り返りを行う

教師は何を教えたのか、子どもたちは何を学んだのか、互いに意識できるようにし、教材によっては生活に生かせられるような取り組みを行う。

それらを記録したり、意識調査をとったりして分析することで子どもたちが学びの意義をどれだけ実感し、学力保証の手立てとなったか効果を検証する。

3. 実践にあたって

年間指導案をもとに、1年生をどのようにE S Dの視点を意識した声掛けや発問をどのようにあつたかを4. 5月の例、10月に実践した音楽の授業の概要を挙げる。

【4月】

新しい仲間とこれから学校生活を送る中で、どのように関わっていくと良いのか、また四季の美しさも絵や音楽から学ぶ。

「はきはきあいさつ」(国語)

・あいさつは何をするのでしょうか。

・○○のような気持ちになるようなあいさつはどのようなものなのでしょうか。

「うたであいさつ」(音楽)

・音楽に合わせてあいさつをするとどのような気持ちになりますか。

「ひらいたひらいた」(音楽)

・友だちと歌いながら体を動かすことはどのような気持ちになりますか。

○コミュニケーションを行う力(伝達)

○他者と協力する態度(協力)

【5月】

読むことにも少し慣れてくる時期である。この時期に意識したことは「拍」「リズム」

である。皆とそろえるためには「拍」「リズム」を使うことが効果的であることを知る。

「さんぽ」(音楽)

・音楽に合わせて皆でそろって歩きたくなりますね。なぜ、児童朝会(本校では集合時に「さんぽ」を流している)では「さんぽ」の音楽が流れているのでしょうか。

「いくつといくつ」「あわせていくつ」(算数)

・2と3で5、2と4で6 何かこの覚え方、音楽のリズムみたいですね。音楽を使うと覚えやすくなりますね。

○多面的・総合的に考える力(多面)

○コミュニケーションを行う力(伝達)

【10月】音楽科の研究授業

①教材:「おどるこねこ」

作曲 ルロイ・アンダーソン

②指導内容:音色や速度によってもたらす音楽の表現の効果

③題材目標:指導要領解説をもとに作成

④この学びがいけること:自分の気持ちや考えをもつこと、また、友だちの気持ちや考えを知ることによって多様な方法を身に付けることができる。何か課題に出合った時に、多様な考えで解決しようとする意識を持つことができる。

○コミュニケーションを行う力(伝達)

授業では、音楽を聴きながら、イメージしたことや考えたことを音楽の表現の工夫から取り上げ、「なぜそう思ったのか」を伝え合う学習を進めた。また、互いの思いを共有する楽しさを感じられるようにすることによって、音楽を聴くことが好きな児童を育てていくことを目指した。

学習中の様子は、楽器の音色や奏法から「猫や!」と気付く児童がほとんどで、踊っている様子を互いに披露し、それをもとに一緒に踊ったり、曲想の変化に合わせて

踊り方を変えたりなど、体を動かしながら音を楽しむことができた。

この実践を通して、児童から以下の通りの意見や考えが見られた。

①「おどるこねこ」でここにのこったところやすきなところはどこですか。

バイオリンの音がねこになっているところ(3人)、全体的に音楽がやさしくてきれい(2人) おどっている感じがすき(5人) 犬が出てくるところがおもしろかった(5人)

その他…楽器が動物の音をつくれることがおもしろかった、途中で踊りに一生懸命になっている感じがして楽しくなってきた。

②友だちの思いでここにのこったところはどこですか。

白いねこがおどっている、夜におどるところ、月が綺麗な夜におどっているのがかわいかった、バイオリンの音だということに気づかなかった、ねこが犬のことを苦手で逃げているのではなくて、ねこが犬のことを嫌いだと思っていた。

③音楽を聴くことが好きになりましたか。

はい(13人)

わからない(2人)

いいえ(0人)

これらの結果から、①の結果では、音楽を味わい、感じたことを言葉に表す学習を進めることができたこと。②では自分や友だちの思いを共有する楽しさを実感できたこと、③では、音楽を聴くことが好きになると意識をもつことができたと考える。

しかしながら、指導者の発問の工夫が足らず、「皆で意見を出し合って何か解決したことはありますか」の問いには「わからない」と答える様子が見られ、発問の改善が必要であると感じ

た。

4. 実践後の振り返り

昨年度より、研究・研修授業後の討議会を次のようにして進めている。

【討議会のすすめかた】

- ① 授業者から参加者へ質問する。
 - ・授業を行って困ったこと、疑問に思ったことを質問する。
 - ・参加者は自分の考えをホワイトボードに記入して提示、授業者、講師、研究主担者がそれを見て話し合いを進めていく。
 - ・その中で、疑問に思ったことなどを参加者は自由に質問をし、対話しながら答えを見つける。
- ② 指導講師による講評

従前は、まずはグループになって付箋を使いながら討議し、付箋などでまとめた意見を代表が発表し、それらを研究主任が総括し、指導講評を最後にいただく流れですすめていた。

昨年度より、指導案の検討は授業までに皆で意見を出し合って作成し、授業後は授業者、または一緒に考えた授業や発問が吟児童にはどれだけ効果的であったか、他の発問案は何かあったかなどを話し合えるようにした。

指導講評に来られた講師は、討議会の始めから参加をしていただき、疑問が出た都度意見をいただくようにした。

本研究の醍醐味は「E S Dの視点でとらえた時、今日の学習は生活のどのようなものに生かせられるか、つながっているか」を教師も子どもも意識することができたかである。

1年生の学習を4月からすすめ、教科横断的な意識の持ち方、その学びが生活にどのように生かせられるかを何度も繰り返し考え、試行錯誤しながら取り組んできた。

日々の学習指導で悩み、考え続けることに合わせて、全教職員で共に考え、意見を

出し合って共有することは、指導力向上にも大きくつながることができる。

5. 効果

(1)子どもの変容

教科学習と合わせてE S Dの視点を意識しながら取り組んでいくと、子どもたちから、学び方の提案が出てくる。

漢字の学習では覚えやすくするために、「音」だと「たつ（立）に～ひ（日）、ヒタチみたいやな！」や、図工科の粘土を丸める活動では、「手の真ん中同士でな、ほんのちょっとだけ力使ってやさしくくるくる回したらええねん」などの意見やアドバイスが自然と出るようになり、皆で一緒に試しながら成し遂げる意欲が見られるようになってくる。

生活科では、四季の移り変わりから学校に共に過ごす虫の変化にも意識を持ち、9月に見つけたバッタの色が茶色に変化していることに気づき、話し合う。そこで、国語科の「どうやってみをまもるのかな」の学習が子どもたちの中で取り上げられる。

A「べんきょうしたやん、自分の身を敵から守るために、工夫してたやん。」

B「あ、ほんまや」

A「虫も夏ははっぱの色に合わせて緑ちゃうか。」

この学びが生きる瞬間を教師は見ることでできたら、「教育」が生きたものになったと実感する。

その後、「みんな遊び」が全員参加にならなかった時には、どうやったら皆が楽しく参加できるのか、遊び内容やルールを考え直したり、「6年生を送る会」では、なぜその会があるのかといったところから話し合ったりすることで、その活動や学びの意義が子どもたちも「考えたい」と意欲を高めるものになったと考える。

2年生になる前の3月は、新しく入学する1年生はどのような気持ちで学校に来るの

かを話し合ったところ「楽しみだけど、初めての学校で少し不安だったり、どんな勉強するのか知りたかったりする気持ちになっている」と考え、それらの気持ちにこたえるためには入学式で伝える必要があるだろうと皆で考えた。そのために、一人ひとりの台詞は子どもたちで全部考えた。また、伝える順番をどうするか、わかりやすくするためには画像をつけた方がよいなどの意見も出て、子どもと教師で一緒にすすめていくことができた。

考えの視野が広がった子どもたちは、生活科のチューリップを育てる活動の時にも次のような意見が出された。

A「これ、何色が咲くんやろうな。」

B「わからんなあ、春までの楽しみやな。」

C「先生、これな（植木鉢）、もっと違うところに置かれへんの？」

先「なんで？」

C「春やったら 1 年生来るやろ、ちょっと学校を綺麗に見せたいやん。」

A「ほんなら春休みに入口に置いといたらええやん。」

先「それは、わかるけど、誰が置くの？」

A「いきいきに迎えに来てくれたら置きにくるから。」

と、自然な会話から活動の先を見通す場面もみられるようになってきた。

子どもたちに年度末に次のような質問を投げかけた。

「勉強は何ですのでしょうか。」

「わからない」と答える子どももいる中で、何人かは以下のような返答があった。

「考える時に、やったことを思い出すため」

「実験をするときとかに必要やから」

「好きな仕事したいから、字も計算も絵もがんばる」

今後も獲得する力を涵養していくために、意識を継続的に持ってすすめることが大切

であると年間の実践を通して感じた。

(2) 教師の変容

本研究を 1 年生対象に担任として年間を通して実践したことによって教師が変容したこと、意識できたことは以下の通りである。

①改めて考え直す

教材を扱う時に常に「この教材では何を教えるのか」を明確にもちながら、すすめることが子どもたちの学びの価値付けになり、また、学力保証になるために必要であると考えた。当たり前の学習が、それぞれに意味のあるもので、それを子どもたちに、どのように学ばせるのかをしっかりと考えて取り組むために、改めて教材を考え直すことが今後は大切である。

②教科横断を意識する

すべての学習がそうであるとは言い切れないが、年間学習計画の全教科、活動を横と縦で見直すことで、それぞれのつながりが見えてくる。特に 1 年生では入学してからの 1 年間の計画は、身に付かせたい力を全教科がそろえて段階を経ていることが視野を広げてみることで明確になってくる。1 年後の姿を見通して、涵養していくことが大変重要である。

③常に考えること

「学ぶ意義を実感する」ことは、子どもたちの「幸せ」につながるという意識を常に持ち続けることである。

子どもたちの日々の学びは一生に一度の大切なものである。その責任を教師は担っているという意識を忘れずに教材研究に勤しむ必要がある。

E S D の視点から学習指導を行う意識

をもつことは、学びの質を改めて考え直すことであると考えた。

6. 今後に向けて

教師と子ども、どちらの視点からも学ぶ意義を明確にもちながら学習指導にあたる必要が本研究では明らかとなった。

よって、今後の学習年間計画を教職員でそれぞれの意義を改めて考え、選定して作り上げる時間が必要であるとする。そのためには、教職員のチーム力を意識すること、それぞれの得意な分野からの視点も取り入れながら、子どもたちの学びの質が高められる教育を推し進めていくようにする。

また、新学習指導要領には幾度となく「持続可能」という言葉が記載されている。これこそが、E S Dの視点に立った指導であり、特別なことではない。新学習指導要領や解説をしっかりと読み解いて教育を進めていくことがE S Dの学びにもなると考える。

参考資料

- ・文部科学省「ESD 教育推進の手引き」
- ・文部科学省 「小学校学習指導要領」
(平成 29. 6 月)
- ・国立教育政策研究所
「持続可能な発展のための教育（E S D）
を学校教育でどうすすめるか」